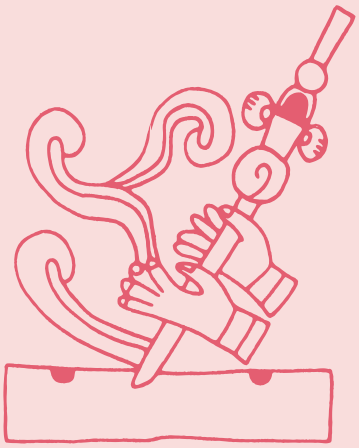
ISSN 2433-2259

京都外国語大学 ラテンアメリカ研究所 紀要

2018



＜論文＞

ちからをはかる：後古典期後期マヤの戦闘の一概念
…… 郷　澤　圭　介　1

＜研究ノート＞

マンガで学ぶ郷土の歴史と文化遺産
―メキシコ、トララランカレカにおける遺跡に関する住民の知識と経験をめぐって―
…… 小　林　貴　徳　25

＜調査研究報告＞

ニカラグアのカリブ海沿岸地域、ブルーフィールズにおける文化再生
―芸術活動の空間と音楽に秘められたメッセージ性―
…… 青　木　　敬　47

イグレシア・ビエハ（Iglesia Vieja）遺跡の調査
…… 金　子　　明　67

Surcos de cultivo prehispánicos encontrados bajo las cenizas del Volcán Plan de la Laguna, El Salvador, C.A.
…… 柴　田　潮　音、オスカル・カマチョ、ホセ・ガブリエル・セレン、ジェニィ・エリサベート・メンヒーバル　99

＜書評＞

桜井三枝子編『グアテマラを知るための 67 章』【第 2 版】
…… 牛　島　　万　115

Vol. 18

〈調査研究報告〉

ニカラグアのカリブ海沿岸地域、ブルーフィールズにおける文化再生

―― 芸術活動の空間と音楽に秘められたメッセージ性 ――

青　木　　敬*

1　はじめに

ニカラグアは太平洋側とカリブ海側で歴史的、地政学的に区分することができる。ニカラグア西部は太平洋に面しており、首都マナグアが位置する。それに対し東部はカリブ海に面しており、南北にふたつの自治区に区分されている。それぞれ北大西洋自治区（首都：プエルトカベサス Puerto Cabezas）と南大西洋自治区（首都：ブルーフィールズ Bluefields）である（図 1）。

本稿は、対象地域であるブルーフィールズで実施した調査の報告であるため、マナグアを中心とするニカラグア西部にかんする情報については触れないことにする。また本報告は、前年に実施したブルーフィールズ調査を継続したものであるため、Aoki（2017）が論じたニカラグア東部のアイデンティティと土地問題にかんする報告をさらに展開したものである。

本論に入る前に、本稿の論点となるカリビアン・アイデンティティの形成プロセスを理解する

図 1.　ニカラグアの地図

（Aoki 2017: 57 からの借用）

＊　京都外国語大学嘱託研究員

ために、以下よりブルーフィールズの歴史を簡潔に紹介する。ブルーフィールズ史を概観するにあたって加賀美（2009）、カリオン・クルス（1996）、Taylor（2005）を主に参考にする。

1-1　ブルーフィールズ小史――イギリス統治からサンディニスタ革命まで

ブルーフィールズ史は16世紀後葉にヨーロッパの海賊の基地となり、その後さまざまなヨーロッパ人が入植することからはじまる。それはほかのカリブ海地域のように、必然的に先住民とアフリカからカリブ海地域へ連れてこられた黒人奴隷が共生することを意味する。

17世紀半ば、ブルーフィールズはイギリス人によって入植が開始されるが、正式にニカラグアのカリブ海沿岸地域（Caribbean Coast）を占領した期間は1740年から1787年までの数十年間である。その後1816年に再びイギリス領となるが、1894年にはニカラグア政府の傘下に置かれる。17世紀から18世紀にかけてイギリスがカリブ海沿岸地域を支配した最大の理由は、その豊富な天然資源だけでなく、大西洋と太平洋の交易ルートを結ぶためでもあった（カリオン・クルス 1996: 130）。敵国であったスペインに対抗するためにイギリスは先住民とヨーロッパ人、黒人奴隷の混血が進んだことで形成された民族、ミスキート（Miskito）を利用し、彼らと同盟を組み、ほかの先住民スム（Sumu）やラマ（Rama）などを奴隷化した。それとは別に、黒人奴隷もいた。このような背景のなかでイギリスは、「ミスキートを文化的侵略し、ミスキートにとっては、「敵」＝スペイン人（中略）、英語を話さないもの」（カリオン・クルス 1996:130）という先入観を植えつけ、これは現在もなお続いている。

19世紀末になるとイギリスはミスキート王国を保護国とするが、イギリスに代わりアメリカがニカラグアのカリブ海沿岸地域の経済に多大な影響を及ぼしはじめる（cf. Taylor 2005）。アメリカの「資本家たちは1890年までに大西洋岸の交易の40 - 50％を支配し」（カリオン・クルス 1996: 131）、次から次へとアメリカ企業がニカラグアへ進出した。アメリカの鉱山会社が設立され、ブルーフィールズ経済は中米一を誇るブルーフィールズ港のバナナ貿易が強大となった（cf. Taylor 2005）。

この流れのなか、20世紀初葉にはアメリカ企業への従属が強まり、カリブ海沿岸地域の天然資源はアメリカに搾取されることとなる。もっとも強調すべきことは、アメリカが大西洋と太平洋を結ぶためのニカラグア運河計画に着手したことである。ニカラグアのカリブ海沿岸地域から首都マナグアが位置するニカラグア西部までの陸路の交通網がなく、1950年代までは、アメリカ南部のニューオーリンズ、ジャマイカの首都キングストンからブルーフィールズ間のほうがマナグアからブルーフィールズよりも容易に往来できるほどであった。

したがってカリブ海沿岸地域ではスペイン語よりも英語のほうが重要な位置を占めていたわけである。実際に、英語を話すクレオールの人びとが専門職に就き、そのほかの職務は英語を話すことができないミスキートと先住民であるマヤングナ（Mayangna）が任されていた（cf. Taylor 2005）。しかしイギリスの保護下にあったミスキートにかんしては、ほかの民族集団との隔離を生むこととなった。このミスキート共同体のなかで重要な役割を担ったのがミスキート語を確立させたプロテスタント系のモラビア教会（Moravian Church）である。モラビア教会がミスキートの「社会関係や居住様式を導入」（カリオン・クルス 1996:133）したのである。

そして1911年から33年までは、実質的にアメリカ海兵隊が統治した（cf. 加賀美 2009）。このようなアメリカを中心とした経済システムは、ニカラグアの「英雄」として崇められているサン

ディーノによって断ち切られたように思われたが、後にサンディーノの暗殺に成功したソモサがアメリカの支援を受け続けながら独裁的な政権を握った。これに不満の声を上げていたミスキートはサンディーノがおこなった革命を引き継いだ（cf. Taylor 2005）。そして 1979 年にサンディニスタ革命軍がソモサ政権に抵抗し、勝利した。その後「サンディニスタは、キューバ型社会主義を導入し（加賀美 2009:25-26）」、これに反対する人びと（＝コントラ軍）がアメリカの援助を受けコントラ戦争が勃発した。これにより「ニカラグア経済は疲弊しインフレは 2 万％を超え」（加賀美 2009:25-26）、最終的に中米大統領が開催した会議によってエスキプラス合意が 1989 年に成立した。しかしながら、土地問題は深刻化したままの状態であった。

このような西欧列強によってつくられた混沌とした社会、文化、政治、経済システムの結果、内戦や土地問題が生じることになった。そこでブルーフィールズに居住する多様な民族集団のアイデンティティ問題は、土地所有や多民族共生の観点から極めて重要なテーマであるといえる。

1-2　クレオールとカリビアンというアイデンティティ概念

ブルーフィールズは 6 民族が共生する地域である（Taylor 2005）。大多数であるメスティソ（Mestizo）、アフリカ系であるクレオール（Creole）とガリフナ（Garífuna）、そして先住民であるスム、ラマ、ミスキートである。これらの民族が共生するなかで、彼らは新しいアイデンティティを生み出そうとしている。そのアイデンティティ標識は「ニカラグア人」や「ブルーフィールズ人」としてではなく、「カリビアン」（Caribbean）としてのアイデンティティである（Aoki 2017）。

興味深いことに、このような民族をあらわす用語[1)]が、ほかのカリブ海地域（たとえばジャマイカ、マルティニークなど）のアイデンティティにかんする思想と類似している。たとえば、植民地主義による凄惨な歴史を歩んできたカリブ海地域では、アフリカや黒人であることを肯定するさまざまな黒人運動――ジャマイカのラスタファリアニズム（*rastafarianism*）やマルティニークのネグリチュード（*négritude*）――が巻き起こった。そしてネグリチュードに次いでアンティル性（*antillianité*）の概念が 1960 年代以降に生まれる。これはカリブ海の島々を統一することで多様な言語文化をもつアイデンティティを共有するという概念である。そして最後に打ち出された概念がクレオール性（*créolité*）である。すなわち、「ヨーロッパ人でもなく、アフリカ人でもなく、アジア人でもなく、我々はクレオール人である」（ベルナベ et.al 1997:13）とクレオール・アイデンティティを表明したものである。

クレオール性の思想はカリブ海地域を文化的に包含するものであり、したがってニカラグアのカリブ海沿岸地域も歴史文化的影響がないとは言い切れない。ブルーフィールズでクレオールを対象におこなった人類学的調査の結果を報告したように、ブルーフィールズのクレオールの人びとはほかのカリブ海地域からの多様な文化的影響を受けており、クレオールの人びとに限らず、ラマやスムなどブルーフィールズの多くの住民が自身を「カリビアン」としてアイデンティティを表明していた（Aoki 2017）。この動きは同時に、南（2014）が提唱する概念「アメリカ地中海文化圏」と類似している点も強調しなければいけない。つまりブルーフィールズをカリブ海地域、あるいは「アメリカ地中海文化圏」という地域的枠組みのなかでみることによって、国境を越えたより広域的な視野をもってある地域にみられる社会システムを観察することが可能となる。カリブ海地域の場合、その重要なキーワードのひとつがクレオールであることは Aoki（2017:70）が作成した「地中海文化圏におけるクレオール語分布」をみれば明らかである。

しかし、「カリブらしさ」と「クレオールらしさ」を混同してはいけない。フィリップス（2007: 265-266）はグリッサンのカリブおよびクレオールの概念について次のように説明している。

> 「カリブらしさとは、カリブ諸島にやってきたヨーロッパ人、アフリカ人、アジア人たちが被ったアメリカ化の過程を指し、（中略）クレオール化とは、ヨーロッパ、アフリカ、アジアの各要素が活発に作用しあい、同じ一つの歴史の坩堝のなかで、新しくユニークななにかを生み出すことである」

本稿では、クレオールと先住民、さらにアフリカ系の人びと、メスティソの人びとが共生しているブルーフィールズの地域をニカラグアとしてではなく、上記で論じたようにカリブ海地域として位置づけたうえで、その多文化共生社会においてなぜクレオール性でもニカラグア性でもない「カリビアン」としてのアイデンティティが創造されつつあるのか、そのプロセスや要因を理解することを意識したうえでの調査報告であることをあらかじめ記しておきたい。

1-3　問題の所在

ニカラグアが抱えている問題は国内における独裁政治と領土の奪い合いであり、ニカラグア西部に属しているメスティソがカリブ海沿岸地域の領土の森林を伐採し、領土拡大を図っていることである。しかしこれは単なる政治的問題ではなく、欧米列強による植民地主義政策やニカラグアを統治してきた歴史的要因でもあり、極めて複雑な問題である。ニカラグア運河構想やイギリスがミスキートにスペインを「敵」であると洗脳したことは、欧米による恣意的な行為によるものであり、冒頭で記したブルーフィールズ小史からもわかる（cf. 小林 1996）。また前回の予備調査により、南北大西洋自治区に侵食しはじめているニカラグア西部出身のメスティソの目的は、カリブ海沿岸地域に存在する豊穣の土地であることがわかった（Aoki 2017）。

前年調査を実施した1年後の2018年3月、政府に対する抗議デモがブルーフィールズで起き、それを生中継していた記者に銃弾があたり死亡した（BBC、2018年4月22日）。その後、ニカラグアの独裁的な政権に対するブルーフィールズ住民による強い反感がさらに高まっている。この反感は、独裁的な政権や「メスティソ」、「スパニアーズ」（Spaniards）[2)] による大西洋自治地域へ侵食していく土地問題とも大いにかかわっている。

1-4　目的

土地問題にもっとも関心を示してるのはブルーフィールズに住むクレオールの人びとである。実際、2018年2月24日にブルーフィールズでは「クレオール集会」（Creole Assembly）が開催され、土地問題にかんする発表や議論、さらに南北大西洋自治地域住民としてのアイデンティティについて歌う音楽家 Shalom（本名は Aldrin Nash）の演奏会など、クレオールの人びとを中心に実に多くの人が参加した（写真1と写真2）。

このようにブルーフィールズの住民が社会的に重視していることは、ブルーフィールズ文化の記録、推進、発信である。これらのプロジェクトが土地問題を直接的な解決まで導くことがなくとも、これまでにニカラグアのカリブ海沿岸地域に根づいた社会を形成してきたことを表示する意味で重要である。しかし、ブルーフィールズは南大西洋自治区の中心地であるにもかかわらず、

その歴史や言語文化など、地域社会にかんする資料はごくわずかであり、実に多くの研究課題が残されている。

そこで本調査では、ブルーフィールズの住民が築こうとしている集合的アイデンティティの指標となりうるもの、すなわち芸術活動とその芸術活動が実践されるプロセスを把握することで、土地問題と密接にかかわっている住民の文化保存、文化構築の実態を理解することを目的とする。

写真 1.「クレオール集会」でおこなわれた発表の様子。
（撮影地：ブルーフィールズ、撮影日時：2018 年 2 月、撮影者：青木敬）

写真 2.「クレオール集会」には多くの人が集い、
いかに住民が土地問題に関心を示しているかがよく理解できる。
（撮影地：ブルーフィールズ、撮影日時：2018 年 2 月、撮影者：青木敬）

また本稿では、とりわけ多くの写真をもちいながら文化再生の場のイメージを十分に示しながら論じたい。

1-5　調査方法

本稿は、ニカラグア東部に位置するブルーフィールズの住民が構築している集合的アイデンティティにかんする調査についての報告書である。調査期間は、2018 年 2 月 17 日から 3 月 7 日までの 19 日間であり、カリビアン・アイデンティティにかんするブルーフィールズの住民への聞き取り調査、芸術活動をおこなっている人びとへのインタビュー、さらに芸術活動のなかでも、とりわけ音楽をとおして南北大西洋自治地域の集合的アイデンティティを確立しようと試みる音楽家の活動にかかわり、参与観察を基礎とした人類学的調査を進めた。

なお、インフォーマントである Franklain 氏とともにパール・ラグーン（Pearl Lagoon）を訪れ、BICU-CIDCA の所長 Donald Byers 氏の協力のもと、カラ・デ・モノ（Cara de Mono）、ムエジェ・デ・ロス・ブエジェス（Muelle de los Bueyes）、ラ・バテア周辺（La Batea）でインタビューをおこなうことができた。主な移動手段は船とトラックであった。しかし、一貫した論を展開するためにこれらの地域については本報告書では触れず、調査の中心地であったブルーフィールズに限定する。

本調査で撮影したインタビュー対象者は 6 人、インフォーマル・インタビューは 16 人に実施した。インタビューは英語とスペイン語でおこなったが、ムエジェ・デ・ロス・ブエジェスでは BICU-CIDCA の所長 Donald Byers 氏のスペイン語通訳をとおしてインタビューをおこなった。

2　文献収集と簡単な紹介

本調査では、ブルーフィールズ社会にかんする基礎的な情報について書かれた一般的な資料から貴重な資料まで、さまざまな重要文献を収集することができた。これらの収集した資料は非売品である点に加え、その多くが口頭伝承を重視している点において貴重であるといえる。大西洋自治地域の多くの民族は口頭伝承の文化をもつためである。筆者は、基本的に大学図書館、教育省、個人による寄贈などでこれらの資料を入手した。それらの文献は以下のとおりである。

- *Bluefields Lantern: Learning about Afrodescendants Rights in Nicaragua*, Blufields Black-Creole Indigenous Communal Government.
  本資料は、ニカラグアにおけるクレオールの人びとの歴史、先住民とクレオールの人びとについての法律を端的に紹介している。これは土地問題に立ち向かうために住民が目をとおすべきものとして作成されたパワーポイントの資料である。
- *Alcaldía del Poder Ciudadano de Bluefields: Región Autonoma Costa Caribe Sur: Caracterización del Municipio de Bluefields Periodo 2013-2017*, Gobierno de Reconciliación y Unidad Nacional.
  本資料は、2013 年から 2017 年までのブルーフィールズにおける地域概要について下記の章立てに沿ってまとめられている。
  第 1 章　地域概要
  第 2 章　歴史概論
  第 3 章　環境

第 4 章　人口動態
第 5 章　領土について
第 6 章　経済
第 7 章　公共サービス
第 8 章　政治と行政

- *The Rhythm of Our Culture*, Bluefields Sound System Production, 2014.
  この短編ドキュメンタリー作品は、ブルーフィールズを中心に、南北大西洋自治地域における音楽をつうじて構築されてきた文化的アイデンティティに焦点をあてた重要な映像資料である。
- *The Black-Creoles*
  このドキュメンタリー作品はニカラグアにおけるクレオールの人びとの歴史について概説し、彼らのアイデンティティについて記録した土地問題の理解にかかわる重要な作品である。
- *Oral History of the Community of Pearl Lagoon*, BICU-CIDCA.
  本資料は、BICU-CIDCA の所長を務める Donald Byers 氏によって実施されたパール・ラグーンにおける口頭伝承をつうじて歴史を記録することを目的とした調査結果である。
- *Estadísticas Educativas Departamental 2015*, MINED-RACCS.
  これは教育省で入手したものであり、南北大西洋自治地域における教育を統計的にまとめた 2015 年の資料である。
- DOWNS, Nubia. *Memorias de Miss Lizzie: Danzas, Música y Tradiciones de Bluefields*, Instituto Nicaraguense de Cultura, 2011.
  本著は非売品ではないが絶版に近く、入手することが非常に困難であるためここで紹介している。1922 年生まれの Lizzie 氏の記憶をつうじて当時のブルーフィールズにおける伝統文化について語られた著作である。

3　芸術センター *Waiku* における芸術活動の空間と実践

調査初日、ブルーフィールズの街を徘徊しているとき、前年のインフォーマントのひとり、Franklain 氏と再会を果たし、彼は街を案内してくれた。彼はサンディニスタ革命時のサンディニスタの兵士であり、現在は無職である。真っ先に向かった場所が、昨年（2017 年）の時点では存在しなかった芸術センター（Centro de Arte y Diseño）、Waiku であった。Waiku には土産品のコーナーが設けられている。そこにはブルーフィールズで採ることができる貝、ココナッツ、木材などで作られたイヤリング、ネックレスなどの装飾品、ブルーフィールズの海をモチーフにした T シャツや絵画、船や動物などの木彫り、伝統楽器などが地元住人や観光客に向けて売られている（写真 3）。

Waiku には数少ない観光客が訪れるだけでなく、ブルーフィールズ住民が喫茶店として利用しているため、地域住民と観光客との会話が飛び交う場でもある（写真 4）。しかし、Waiku の重要な役割は別にある。Waiku は芸術が創造される空間であり、芸術家に活動する場所を提供している。たとえば、写真 5 にみられるのは、土産品の T シャツをプリントするための部屋である。Waiku のふたりの責任者はデザイナーであることから、土産品を販売するためのモノづくりに励んでいる。

写真 3.　Waiku の責任者のひとり。背景には土産品が置かれている。

（撮影地：ブルーフィールズ、撮影日時：2018 年 2 月、撮影者：青木敬）

写真 4.　Waiku の喫茶店では住民と観光客の交流の場にもなっている。

（撮影地：ブルーフィールズ、撮影日時：2018 年 2 月、撮影者：青木敬）

写真 5. プリントＴシャツをつくるための作業場。

（撮影地：ブルーフィールズ，撮影日時：2018 年 2 月，撮影者：青木敬）

写真 6. Waiku の責任者は運営とＴシャツのデザインを手がけている。

（撮影地：ブルーフィールズ、撮影日時：2018 年 2 月、撮影者：青木敬）

Waiku では、2 ヵ月に 1 度アマチュア音楽家による演奏がおこなわれ、ほかにもさまざまなワークショップ――たとえば子供のための伝統的なダンス（May Pole, 4-1「文化再生」が意味することを参照）――が月に 1 度実施され、幅広くブルーフィールズ文化を発信すると同時に、アマチュア芸術家の活動場としての役割を担っている。ふたりの責任者は、Waiku の目的は地元文化を推進していくことだと語っている（写真 6）。

つまり、Waiku はブルーフィールズの住民がみずからの文化を構築していくための重要な場であることが理解でき、クレオールやメスティソなど民族集団によって区分されることのない、混在したメルティングポットのような空間である。また、このような活動は、SNS（Facebook: Waiku – Centro de Arte y Deseño）をつうじて確認することが可能であり、文化構築の実践という意味では重要な発信方法である。

4　音楽活動の場――‘Bluefields Sound System’ の役割

ブルーフィールズの中心部からタクシーに乗り、15 分ほど北東の方角へ向かうと道路から外れた泥沼のような道がある。その道を下ると一軒のコンクリートで作られた家屋がみえる。そこで Bluefields Sound System の活動がおこなわれている。外観からでは民家にしかみえないその建物の中へ入ると広い演奏スペースがあり、レコーディングのスタジオが一室ある。ディレクターを務めると同時にドキュメンタリー作家でもある Michael Allen 氏と歌手の Shalom 氏の仕事場が Bluefields Sound System である（写真 7）。質素な外見をしている Bluefields Sound System の小さな空間で、ブルーフィールズ文化の「再生」が実践されようとしている。次節では、本稿でもちいる「再生」がなにを意味するかを概説する。

4-1 「文化再生」が意味すること

今回実施した、住民を対象としたアイデンティティにかんする聞き取り調査では、次のような表現をする人びとが非常に多かった。「われわれは文化をもたない」（87 歳男性、無職）、「漁業以外の文化は存在しない」（30 歳男性、漁師／ 55 歳男性、店主）、「ギャングスタ、暴力、セックス、

写真 7.　Bluefields Sound System の一部。
ここでドキュメンタリー編集や音楽の練習をおこなう。
（撮影地：ブルーフィールズ、撮影日時：2018 年 2 月、撮影者：青木敬）

ドラッグをテーマとした「下品な」ヒップホップやトラップ音楽の影響がブルーフィールズの治安を悪くし、文化が失われている原因になっている」(52 歳男性、無職)。インタビュー対象者は老若男女を問わずに実施したが、現時点で示すことができる人のデータの多くは高齢の男性である。このような『下品な』ヒップホップについての語りは、クレオールの人びとが住むオールド・バンク区(Old Bank)、ビホルドゥン区(Beholden)、ポインティーン区(Pointeen)で度々耳にした。「下品」という単語が表現される理由としては、①伝統的なダンスである May Pole の踊り方が変化したうえに伝統的なダンスをする人びとが減少したこと、②若者が年長者に対して尊敬の念がない＝ヒップホップの「下品な」歌詞が実生活に悪影響を及ぼしている、ということが主な理由であった。

昨年の調査の段階では、食文化がアイデンティティの指標として考えられる可能性が高かったものの、その指標自体が非常に限定的であることは確かである(Aoki 2017)。このような限定的な文化に誇りを感じない人や、レゲェやヒップホップなどの音楽がジャマイカやアメリカの真似事だとして批判する人、すなわちブルーフィールズに根づいている(あるいは根づこうとしている)文化に対して侮蔑的な考えをもつ人がいる。さらに文化が存在しないと考える人もいるほどであり、アイデンティティにかんする指標を見出すことは容易ではない。

しかし、かつてブルーフィールズではジャズが流行し、Navy Jazz Band というジャズバンドが 1932 年に結成されている(写真 8)。アメリカの海兵隊によって伝わったジャズがブルーフィールズの文化として取り入れられようとしていた時代である。Waiku でインタビューしたアマチュアジャズ奏者はブルーフィールズにおけるジャズについて次のようにインタビューで語った。

インタビュー日時(2018 年 2 月 21 日)
名前:Carlos L. F.、職業:ガソリンスタンドの店員/音楽家、性別:男性、年齢:28 歳)
(本文中の[ ]は筆者によって加えられたものである)
Carlos L. F. **氏)**

ジャズがどれくらいブルーフィールズで需要があるのかはわからないが、それでもかつてアメリカとの貿易によってジャズの影響を受けたことは間違いなく、当時は流行していた。今後ジャズがブルーフィールズの文化として根づくかは不明だが、昔[20 世紀前半]のブルーフィールズの文化を取り戻そうとすることは大事である。

ブルーフィールズの伝統音楽といえば May Pole である。May Pole はヨーロッパの伝統的祭事であり、柱のように直立させた丸太(pole)のまわりを踊る。これは元来、豊作を祈ることが目的であり、したがって 5 月にしかおこなわれない祭事である。現在では、アフリカ文化とヨーロッパ文化が混淆したことにより、パレードを行進したのち、一晩中踊るというアフリカ的な様式へと変化を遂げている。しかし、年に一度しか開催されない祭事とは反対に、Carlos L. F. 氏のようなアマチュア奏者[3]による演奏は、日々おこなわれている日常的な行為である。それは Waiku という空間で音楽の練習に励むこと、地域住民のためのコンサート(Carlos L. F. 氏の事例)だけでなく、あらゆる芸術関係の実践――絵を描くための教室、ウミガメや植物などブルーフィールズの産物を基調としたモノづくりなどの日常的実践である。このように考えれば、伝統とは異なり、日々創られるジャズには新たな文化産物へと発展する可能性が秘められている。また、Carlos L.

F. 氏による「昔のブルーフィールズ文化を取り戻そうとする」という表現は、まるでジャズが元来ブルーフィールズの文化の一部であったかのような言い方である。

ブルーフィールズで音楽を演奏する人は少ない。住人は音楽にかんして受動的な人が多く、演奏者よりも音楽を聴く人のほうが多い。その一方で、インタビューを実施したアマチュア奏者のように音楽に対して能動的に向き合いながら、昔のブルーフィールズに存在したジャズを「取り戻そう」と試みる少数の人びとがいる。彼らはいま・ここで、新たな音を取り入れたジャズを自文化として発信することで文化を再生または生成することを目指している。これをブルーフィールズに居住する「能動的」な人びとは実践しており、今回の調査でさまざまな事例を得ることができた。

そのなかで Bluefields Sound System を拠点に音楽活動をおこなう音楽家とドキュメンタリー作家などのアーティストたちは、自文化に対しての誇りを取り戻すためにかつてブルーフィールズに存在した多くの文化を住民に理解してもらい、南北大西洋自治地域におけるさまざまな音楽やダンスを対象としたドキュメンタリーをつうじて記録、発信している。

これが本稿でもちいている「文化再生」の意味である。文化を再生させることで、あるいは再生に留まることなく新たな文化を創造することで、ブルーフィールズ文化を構築していく動向にある。ブルーフィールズの人びとがみずからの文化を構築することはすなわち、南北大西洋自治地域における多様な文化を認め、それらの文化を南北大西洋自治地域に属する人びとの集合的アイデンティティのもつ特徴として組み込もうとしている。

Hitos de nuestro béisbol

La visita del

Navy

al Pacífico en 1932

写真 8.　Navy Jazz Band の歴史が新聞に記載されている。
この資料は BICU-CIDCA に展示されている。
（撮影地：ブルーフィールズ、撮影日時：2018 年 2 月、撮影者：青木敬）

4-2　反政府運動としての音楽

上記したことは、Bluefields Sound System が作成したドキュメンタリー映画 *The Rhythm of Our Culture*（2014）からもわかる。本作品は、ブルーフィールズの歴史文化を論じるうえで欠かせない伝統音楽 May Pole を扱っている。しかし、現在の May Pole の形式にかんして不満をもつ年長者が大勢いる。このことは世界の至るところでみられる「伝統対現代」の二項対立的な議論であるため、決して珍しいことではない。本作品の重要な点は、May Pole がブルーフィールズにとって重要な文化的アイデンティティであることを表明している点にある。このように、住民によるインタビューを取り、それをドキュメンタリーに組み込むことでより身近に自文化を感じさせ、それを国内外へ発信することを可能としている。これは、ブルーフィールズの住民にとって価値あることである。なぜならば、みずからの文化をニカラグア全国に向けて発信するという行為は、みずからの領土の保守につながるからである。これが Bluefields Sound System の関係者が意図していることである。

もうひとつの事例がある。Shalom 氏はタスバ文化（Tasba Culture）（写真 9）に強い想いを抱いている。タスバ = Tasba はオリノコ（Orinoco）付近に位置する。彼の考えにもとづけば、タスバとはオリノコのほかに、プエブロ・ヌエボ（Pueblo Nuevo）、ブラウン・バンク（Brown Bank）、コーン・アイランド（Corn Islands）、ブルーフィールズの文化が包含される。Shalom 氏はこのように領土に根づく文化を総合することによって自分の居住地を一体化させ、領土に対するアイデンティティを強めようと試みている。また、次節で示すように、Shalom 氏の政府に対する辛辣な歌詞がそれを物語っている。一方で、Shalom 氏はクレオールを以下のように位置づけており、その考えがカリブ海地域の黒人運動、ネグリチュードに近似している点は興味深い。

なお、下記の語りは Shalom 氏と筆者のあいだでカリビアンの概念について交わした会話であり、会話の内容を後に筆者がノートをとったものである。そのため録音はしておらず、筆者の質問を記していない。

写真 9.　Shalom 氏の自宅に立たれている看板。
「われわれの土地を一刻も早く守りましょう」と看板下部に記されている。
‘Shalom’ とはヘブライ語 [4] で「平和」を意味する。
（撮影地：ブルーフィールズ、撮影日時：2018 年 3 月、撮影者：青木敬）

聞き取り日時（2018 年 2 月 28 日）
名前：Shalom（本名 Aldrin Nash）、職業：歌手、性別：男性、年齢：45 歳
Shalom 氏）

カリビアンというアイデンティティには、すべての民族のコミュニティが含まれており、『アフロ』がその中心にある。すなわち『アフロセントリック』である。われわれのルーツはケイマンやジャマイカ、ベリーズなどにあるため、カリビアンなのだ。同時にそれぞれのコミュニティは独自の文化をもっている。そしてコミュニティ同士に共通する文化も存在する。

クレオールの人びとは土地問題に強い関心を抱いており、ブルーフィールズの文化を発信しようとしていることがわかる。そのため、クレオールがブルーフィールズのコミュニティの中心になりつつあることが、カリビアン・アイデンティティを論じるうえで留意すべきことである。つまり、アフロ中心主義やクレオール中心主義的な思想が強くなることが懸念される。

5　上映会の公開と参加者の語り

Bluefields Sound System では、すでに上で説明したような短編ドキュメンタリー映像が記録されているだけではない。本調査期間中、ドキュメンタリー映像が数十年前のバンド、Zinika Band のメンバーに向けて野外上映されるという予定であったため、筆者も主催側として会場設営、伝統料理とラム酒などの準備をおこなった。この日は街で料理の買い出しをおこない、Bluefields Sound System の隣りにある音楽家 Shalom 氏の自宅で上映会兼 Zinika Band による演奏が実施された。

まずは、伝統料理である魚の Rondón をココナッツで十分に煮込む（写真 10）。その間に次々と Zinika のバンドメンバーとその友人や関係者が集い、ギターを掻き鳴らしながら日が暮れるのを待った（写真 11）。そして夜が更けると野外で上映会が始まった。このドキュメンタリーに映されている人は皆 Zinika のバンドメンバーであり、上映後には今後のブルーフィールズ文化の促進、それぞれの音楽にかんする考えや感じ方など、意見を出し合った（写真 12）。これにより、個々の考えが明確に伝わり、今後、ブルーフィールズ文化をどのように促進すべきかについて考える機会となった。その後は、Shalom 氏の自宅で夜中まで Zinika Band の演奏がおこなわれた（写真 13）。写真 14 は、その際に使われていた楽器であり、日常用品でつくられたものである。

彼らは皆、音楽が文化的アイデンティティとして重要な指標になりうると信じ、音楽の発信力を重視している。いずれは彼らの声がラジオで流れ、ブルーフィールズ住民が Zinika Band の音楽に誇りをもてるようにと切望している。しかし、もっとも注目すべきことは、Shalom 氏を筆頭に、多くの歌い手が政府に向けた辛辣なメッセージを歌い、南北大西洋自治地域の文化を称賛するような内容を作詞していることである。これらのメッセージとは、冒頭で記したニカラグアにおける土地問題と大いに関係している。つまり、歌詞にはみずからの領土に対する誇りとアイデンティティを強くあらわしており、隠語をもちいながら政府に対する批判を交えている。

本報告書では、政治的問題を回避するために、これらの「メッセージ」を含んだ歌詞を紹介することはしない。上映会の最後に、歌い手のひとりが次のように語った。「われわれは『カリビアン』として大西洋自治地域を独立させることを心から願っている。それ以外になにもいうことはない」。

写真 10. ココナッツで煮込んだ伝統料理 Rondón はジャマイカから伝わったカリビアン料理である。

（撮影地：ブルーフィールズ、撮影日時：2018 年 3 月、撮影者：青木敬）

写真 11. Shalom 氏の自宅に集まってきた音楽家たち。

（撮影地：ブルーフィールズ，撮影日時：2018 年 3 月，撮影者：青木敬）

写真 12.　Zinika Band のメンバーに向けた野外上映会の様子。
（撮影地：ブルーフィールズ、撮影日時：2018 年 3 月、撮影者：青木敬）

写真 13.　上映会が終わると，演奏とダンスが夜中まで続いた。
（撮影地：ブルーフィールズ、撮影日時：2018 年 3 月、撮影者：青木敬）

写真 14.　‘Wash Pan’（洗濯鍋）と呼ばれる楽器。
（撮影地：ブルーフィールズ、撮影日時：2018 年 3 月、撮影者：青木敬）

6　おわりに

南大西洋自治地域における一部の人びと（主に芸術に携わっている人びと）は文化再生の実践をとおして新しいアイデンティティを創造しようと試みていることがわかった。多くの住民は、みずからを「カリビアン」と位置づけることで新たなアイデンティティを創出しようとしている。冒頭で論じたブルーフィールズ史や報告書（Aoki 2017）、聞き取り調査をもとにした筆者の推測にすぎないが、カリビアン・アイデンティティの動きの背景には土地問題やこれまでの西欧列強による植民地や統治という負の遺産を克服する意図があるようにみえる。具体的には、①ニカラグアのカリブ海沿岸地域における歴史文化的側面の共通性を見出すことで集合的アイデンティティを共有すること、②先住民とアフリカ系の黒人たちが共生することで他国のカリブ海地域との文化的結束、または紐帯を認識していくこと、③そのために自文化の形成、あるいは再生を試みて地域住民に根づかせることである[5)]。

問題とするところは、カリビアン・アイデンティティがなにを指標としているかである。それは食文化のほかにも、Waiku や Bluefields Sound System の活動からもわかるように絵画、モノづくり、音楽などの芸術全般である。また、Bluefields Sound System に、Caribbean Cultural Centers for Arts and Music というプロジェクトがあるが、ここでもちいられている ‘Caribbean’ は、アフロセントリック、つまりアフリカ系の人びとを中心とした共有されたアイデンティティの意味合いをもっている。彼らの文化再生としての活動は、コミュニティの人びとの文化と言語を記録し、発信することである。

これらの文化産物はポリティカルな意味で利用されようとしている。それが本稿で問題にした土地問題と深く関係する。すなわち、南大西洋自治地域の領土から採れる資源（木材、魚、果物など）はみずからの文化継承に必要なことであって、アイデンティティを守り続けるうえで必要なことである。ブルーフィールズ住民の場合、その多くがみずからの文化を漁業に依拠する傾向にある。

しかし、少数のアーティストたちは南北大西洋自治地域の領土をメスティソ（＝ニカラグア政府、あるいは太平洋側のメスティソの人びと）から守るためにブルーフィールズの文化再生を図り、カリビアン・アイデンティティという新しい概念をとおしてコミュニティ内における多民族間の共有性を目指している。カリビアン・アイデンティティとは、多民族を結束させるための概念として重要な役割を果たすといえる。また、文化再生はやがてブルーフィールズの文化として根づき、それは彼らの伝統となり得るだろう。

今後、ブルーフィールズの人びとは本稿で論じたような多層的な性格が組み込まれたカリビアンとしてのアイデンティティを誇りに思えるのか、あるいはカリビアンという集合的なアイデンティティではなく、個々の民族集団がそれぞれのアイデンティティを受け継ぐ形をとるのか、どのようなアイデンティティに属するのかという選択肢に迫られるだろう。これからのブルーフィールズにかんする人類学的調査では、聞き取り調査の継続に加え、より本格的に、アンケート調査やほかのプロとアマチュアの音楽家のメッセージ性を分析することが必要となる。そのときにはじめてカリビアン・アイデンティティの動向を真に理解できよう。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 JP16H05665 の助成を受けたものです。研究代表者である南博史先生（京都外国語大学）、ブルーフィールズで手助けをしてくださったインフォーマントの方々に深くお礼申し上げます。

注

1）ほかにもコステーニョ（Costeño）、アフロカリビアン（Afro-Caribbean）、カリビアン（Caribbean）などの呼称が存在する。
2）ブルーフィールズの住民がニカラグア西部の人びとを差別的にもちいる言い方であり、ニカラグアにおけるすべてのメスティソに対する呼称ではないことに留意したい。
3）ここでいう「アマチュア」とは、現段階において演奏で生計を立てていないものの、定期的に演奏の練習をおこなっている人を指している。Carlos L. F. 氏は自身がアマチュアである旨を話していたため、本稿では「アマチュア」という語をもちいている。アマチュアかどうかは、ブルーフィールズ社会において重要なことである。仮にプロの音楽家であれば住民とニカラグア政府へ影響を及ぼすことが可能であり、その場合、ブルーフィールズの文化構築にも大きなインパクトを与えることが推測される。現に、Shalom 氏は歌手活動をおこなうためのニカラグア政府による補助金を受け取ることができないでいるが、その理由は Shalom 氏が土地問題やこれまでのカリブ海沿岸地域における歴史について歌うことが政府にとっては政治上、都合が悪いためである（Shalom 氏の証言より）。
4）Shalom 氏によればヘブライ語である理由に深い意味はない。平和構築を目指したいということが重要であると話していた。
5）「カリビアン・アイデンティティ」にかんするデータは、本調査だけでなく、前年の調査 Aoki（2017）を吟味したうえでの結論であることに留意したい。

引用文献

Aoki, Kay
2017　"Positioning the Creoles within the 'American-Mediterranean Regions': Racial Identity and Land Demarcation in Bluefields, Nicaragua", *Boletín del Instituto de Estudios Latinoamericanos de la Universidad de Estudios Extranjeros de Kyoto*, Vol. 17, pp. 57-74.

Taylor, Deborah Robb
2005　*The Times and Life of Bluefields: An Intergenerational Dialogue*, Academia de Geografía e Historia de Nicaragua, Managua.

加賀美充洋
2009　『貧困国への援助再考―ニカラグア草の根援助からの教訓』、アジア経済研究所。

カリオン・クルス、ルイス
1996　「ニカラグアにおける民族集団と紛争」、『否定されてきたアイデンティティの再発見―ニカラグアにおける多様性の模索』、外国学研究第 34 号、pp. 125-146、神戸市外国語大学外国学研究所。

小林致広
1996　「略奪されたアイデンティティの模索」、『否定されてきたアイデンティティの再発見―ニカラグアにおける多様性の模索』、外国学研究第 34 号、pp. 1-21、神戸市外国語大学外国学研究所。

辻豊治、南博史
2014　「ニカラグア学術調査報告『2014 夏季調査』―アメリカ地中海文化圏研究へのアプローチ」『京都ラテンアメリカ研究所紀要』、第 14 号、pp. 161-183。

フィリップス、キャリル
2007　『新しい世界のかたち―黒人の歴史文化とディアスポラの世界地図』、上野直子訳、明石書店。

ベルナベ、ジャン、パトリック・シャモワゾー、ラファエル・コンフィアン
1997　『クレオール礼賛』、恒川邦夫訳、平凡社。

インターネットサイト

BBC “Nicaragua reporter killed during Facebook Live amid unrest” 2018 年 4 月 22 日付 https://www.bbc.com/news/world-latin-america-43855090、（アクセス日：2018 年 10 月 9 日）。

ISSN 2433-2259

BOLETíN del

Instituto de Estudios Latinoamericanos
de la Universidad de Estudios Extranjeros de Kyoto

Instituto de Estudos Latino-Americanos
da Universidade de Estudos Estrangeiros de Kyoto

2018

＜ARTÍCULOS＞

"Medir la fuerza":
un concepto de la batalla maya en el Posclásico tardío
…… Keisuke GOZAWA 1

〈NOTAS Y COMENTARIOS＞

El *manga* como herramienta didáctica para la difusión del patrimonio cultural y la historia local: el conocimiento y la experiencia que la población tiene con el sitio arqueológico en San Matías Tlalancaleca, México.
…… Takanori KOBAYASHI 25

〈NOTAS DE INVESTIGACIÓN＞

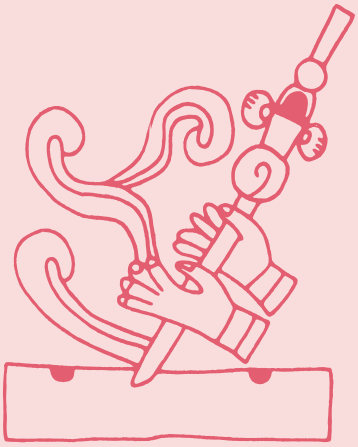
The Cultural Revitalization in Bluefields, Caribbean Coast of Nicaragua: Spaces for Art Activities and Musical Expressions
…… Kay AOKI 47

Investigación del sitio arqueológico Iglesia Vieja
…… Akira KANEKO 67

Surcos de cultivo prehispánicos encontrados bajo las cenizas del Volcán Plan de la Laguna, El Salvador, C.A.
…… Shione SHIBATA, Oscar CAMACHO, José Gabriel CERÉN y Jenny Elizabeth MENJÍVAR 99

〈RESEÑA DE LIBROS＞

67 capítulos para conocer Guatemala, segunda edición, compilado por Mieko SAKURAI …… Takashi USHIJIMA 115



Vol. 18